

スターチスのコンテナ式簡易養液栽培における培養液管理（1）

－培養液濃度は EC1.2～1.5dS/m－

1. はじめに

スターチス・シヌアータの栽培では、土壤病害の発生が生産を不安定にする大きな要因となっています。そこで、耕種的防除法の一つとして、コンテナ式簡易養液栽培技術の開発を行っています。ここでは、培養液濃度についての試験結果を紹介します。

2. 試験方法

「サンデーライトブルー」を2000年9月11日にフェノール発泡樹脂を充填したコンテナ（プランター（64×24×19cm）；以下プランターと記述）に2株定植しました。培養液は愛知カーネーション処方を用い、給液は1プランターにつき1日当たり675mlとしました。

初期（9月11日～12月6日）と中期以降（12月7日～4月30日）の培養液濃度を表1のとおりとし、1区6株の3反復で調査を行いました。

3. 試験結果

切り花本数は、初期 EC1.5dS/m、中期以降 EC0.8dS/m で管理した C 区と栽培期間中

表1 試験区の設定

試験区	培養液濃度 (dS/m)		
	初期	中期	後期
A	1.5	1.5	1.5
B	1.5	1.2	1.2
C	1.5	0.8	0.8
D	1.2	1.2	1.2
E	1.2	0.8	0.8
F	0.8	0.8	0.8

注) 初期：9月11日～12月6日

中期：12月7日～2月9日

後期：2月10日～4月30日

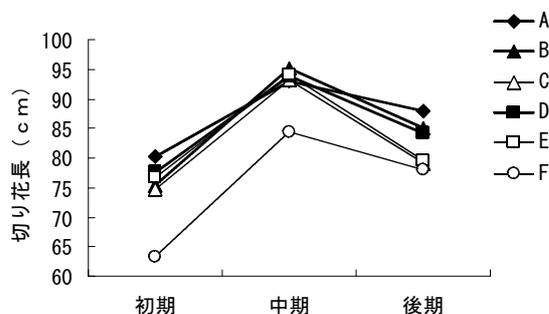


図2 時期別切り花長

EC1.2dS/mのD区で若干多くなりました(図1)。切り花品質(切り花長、花房数)については、全期間をとおして EC1.2～1.5dS/m で管理した A 区、B 区、D 区は、他の区に比べて後期までボリュームのある切り花が得られましたが、中期以降 EC を0.8dS/m に変更した C 区、E 区は、後期に切り花品質が劣る傾向にありました。栽培期間中 EC0.8dS/m の F 区では、切り花品質が他の区に比べて劣りました(図2、3)。

4. おわりに

以上から培養液の EC 濃度は、栽培期間中 1.2～1.5dS/m で管理すれば良いことがわかりました。

この方法では排水が出るため、今後はより環境負荷の少ない培養液管理法について、培養液濃度と給液量とを組み合わせで検討します。

(園芸部 宮前治加)

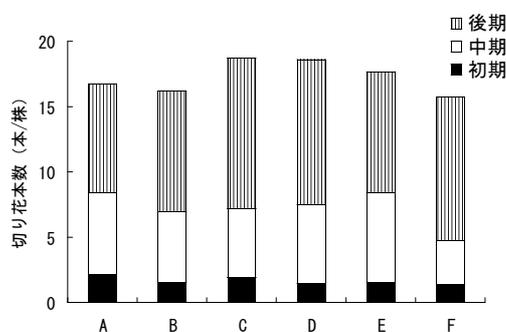


図1 時期別切り花本数

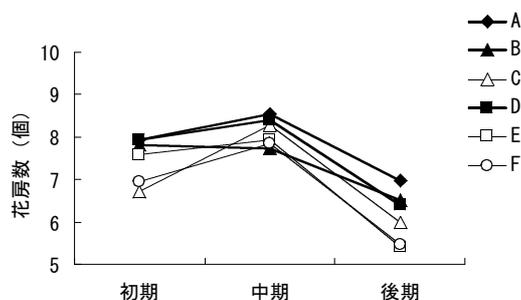


図3 時期別花房数